

平成29年度農業委員会
行政視察報告(11月8日～9日)

農業委員会では、平成28年5月にいち早く新体制に移行した「岐阜県瑞穂市農業委員会」、平成28年度地産地消優良活動の交流促進部門で農林水産大臣賞を受賞した「ファーマーズ・マーケットおうみんち」を訪問し、事例報告や施策について研修しました。

岐阜県瑞穂市農業委員会

山がない。日頃見慣れた山が360度見当たりません。平野一面、黄金色に実ったイネは刈り取りの真最中。聞けば日本で一番遅く田植えが行われる地域のようにです。豊岡とのギャップを感じます。

瑞穂市は岐阜県南西部、岐阜市と大垣市の中間に位置し、平坦な地形と豊富な水を利用した水稲栽培を中心に、果樹、花きの栽培が盛んな田園地帯。なかでも富有柿は瑞穂市が発



瑞穂市農業委員会会長から説明を受ける

祥地で、県内はもとより愛知県や関東・関西地方にも出荷され、近年はジャムに加工して販売するとともに学校給食にも利用される。

瑞穂市役所では、全国的にも数少ない女性農業委員会会長である高田里美氏が笑顔で出迎えてくださいました。瑞穂市農業委員会は法改正後いち早く新体制に移行し、農業委員14名(うち女性農業委員4名)、推進委員10名で構成され、農業委員と推進委員が連携しつづも、役割分担を明確にするなどで実効性の高い活動を実施されています。従来

の許認可活動に加え、農地パトロールの実施やヨシの駆除、シルバー人材センターを紹介して草刈りをするなどの遊休農地の防止・解消活動。カラス・カワウ・ヌートリア・ジャソニシ等の有害鳥獣駆除活動。ただ、山地がないことか

らシカ・イノシシ等の大型獣はいないとのこと、うらやましいかぎりです。また、市社会福祉協議会が実施する学習支援事業に、農業委員会が協力して子供食堂を実施するなど、農福連携にも取り組まれています。子供食堂では子供たちの夏休みの宿題など学習支援の後の昼食の時間に、女性委員が生産された柿ジャムやピーマンなどを使って、子供たちと一緒にデザートやたこ焼き作りをされ食育にも積極的に取り組んでおられます。等々、参考になる事例を紹介いただき、たわわに実ったイネのように実のある視察研修になったことに感謝。

研修終了後、試食したジャムは大変おいしく、土産にいただいた富有柿は色も形も見事なものでした。

追記 宿泊したホテルの売店で「県産品愛用推進宣言の店」という立て看板を見かけました。市民一丸となって地産地消に取り組まれる姿勢に感慨深い思いがしました。

(齋藤善久委員)

ファーマーズ・マーケット
おうみんち

ファーマーズ・マーケット

「おうみんち」は、滋賀県守山市洲本町、琵琶湖大橋東詰から5kmほど東に入ったところに位置する。周辺には、主要な道路もなく、広い畑の中に建っている。この、ファーマーズ・マーケット「おうみんち」は、平成28年度地産地消優良活動の交流促進部門で農林水産大臣賞を受賞した。コメ中心の農業からハウス野菜・ハウス園芸にと農業の多様化に地元のJAが力を入れている。特に守山メロンは有名で、イチゴ・ナシ・ぶどう・柿・なばな(菜の花)等が、農業の中心になりつつある。

「おうみんち」の経営主体であるJA「おうみ富士」の担当者は、売上10億、愛されて50万人を目標に取り組んで来られ、設立から10年経過した今、売上11億円、利用者44万人になったという。利用者内訳は、地区内4割・地区外利用者6割で、近年は県外からの利用者が増加している

と聞く。直売所の他に、お母さんたちが、地元の食材で作った手料理がバイキング形式で味わえるレストランが併設されている。「安全・安心・新鮮な野菜をおうみんちから食卓へ」を、合言葉に日々取り組んで来た成果が、農林水



産大臣賞に繋がったのだろう。ここでは、消費者交流の環境として、青空フィットネスクラブ・畑の直売所・学校給食への食材提供などを行うとともに、若いママさんに、安全、安心、美味しいものを食べてもらうための取り組みに力を入れていると担当者が力強く話されていた。

現在550名の生産者が登録しているが、高齢化に伴い生産農家が減少しているとのこと。

ファーマーズ・マーケット「おうみんち」は地域農業を守る取り組みとして、新規就農者に施設利用やICT技術を取り入れた農業指導を積極的にを行っている。

「採れたての農産物をその日の食卓へ。」まさしくこのことが農業の基本であると感じた。(田中直喜委員)



自慢のぶどうと

新規就農3年目

出石町上村 中嶋 敏博さん (37歳)

兵庫県の担い手育成総合支援事業で農業研修を受講した際に果樹栽培を志した中嶋さんは、豊岡のぶどう農家でさらに一年間研修を受け、そこで技術を学び一昨年に地元出石で新規就農され、ぶどうを中心に野菜と菌床椎茸を栽培しておられます。

一番のこだわりは無農薬栽培。「高品質で美味しいものを作りたい。しかも安全なものを」という確固とした信念のもと、有機物での土づくりに重点を置き、土を良くして木を育てるという方針で、ぶどうも野菜も無農薬で栽培されています。

ぶどう栽培では、ブラックビートやシャインマスカットなど最近の優良品種を選び、定植から露地では3年目、ハウスでは2年目を迎えた今年、初めて収穫できたそうです。再来年には本格的に収穫できるとのこと。

大粒の美味しいぶどうを目指し、今後も農薬や化学肥料に頼らないという考えで、土づくりと木の管理を続けていくそうです。

また、ぶどう棚を自前で設計し、自作されたということですが、その作業には農業を行っている仲間がたくさん集まって助けてもらい、大変ありがたかったとおっしゃっておられました。

「農業は楽しくやりがいがある。自身がこだわりをもって良い物を作り、それを喜んで食べていただける人に届けることができる素晴らしい職業。」と話される中嶋さん。

豊岡で有効利用されていない農地が多いことを憂慮されており、「高齢化が進む今、もっと若手の農業者が増え、地域の農業が盛り上がりて欲しい。」と、同じ志を持った農業者が増えることを期待されていました。(蜂須賀久人委員)

家族で取り組む魅力ある農業経営

出石町嶋 瀬尾 雅仁さん (34歳)

「神戸で育ち、家電販売店に勤めていて、まさに夢にも思わなかった農業です。」と瀬尾さん。24歳の時、結婚を機に婿養子として出石の専業農家を継ぐことになり、一生ここで暮らすのなら「ここでしか出来ない農法で！」と父のやっていた農業を教えてもらい、「自然を守り安全安心なコウノトリ育む農法」に魅力を感じて実践しているそうです。

現在、14haの田と、延べ26aのビニールハウス(小松菜・水菜・ほうれん草他)の営農を行い、各自が決められた仕事を分担、責任をもって管理するなどの家族経営で取り組まれています。

こだわりは、お米を販売する時、ただ品種・産地をうたうだけではなく、そのお米を「誰がどんな気持ちで作っているのか、どんな物語が込められているのか」ということを少しでも知ってもらうように心がけているとのこと。

また、「自分のふるさどである神戸など、都会の人にも“美味しい”と言ってもらえるお米を食べてもらいたい。そんな気持ちを込めてトラクターを運転し、米作りに励む日々です。」とも。

お米を棚に陳列し販売をしている最中には、お客さんとの会話を楽しみつつも、しっかりと自分の気持ちを伝え買ってもらおう努力を行い、今では地元スーパーをはじめ、神戸近郊の直売所にも販売ルートを広げての経営です。

若い二人が両親の教えを真摯に受け止めながら、さらに新たに積み上げた農法での農業経営。24歳で全く知り合いのない出石に来られて以降、積極的に農業クラブやJAの青年部組織に所属し、仲間を増やしてきばっとられます。

今、高齢化が進む中、こうした若い世代が交流を深め、さらに自然を守る農法が次世代に引き継がれることを期待しています。(水嶋義彦委員)



さあ～ みんなでお米の出荷に～